

記録映画アーカイブ・プロジェクト第3回ミニワークショップ「関東大震災の記録」

日時：2015年3月13日（金）18:00 東京大学工学部2号館9階92B

上映とお話：大澤浄さん（東京国立近代美術館フィルムセンター研究員）

「関東大震災の記録」（株）東京カラーフィルム所蔵、35分）

「関東大震災」（熊本市博物館所蔵 7分）清田キネマ社

「大震災」（英映画社所蔵、7分）

東日本大震災から4年の節目となる今回のワークショップは、保存活動の中で新たに発見された関東大震災の記録映画を上映します。日本の記録映画の実質的なスタートといわれる1923年の関東大震災の記録は数人のカメラマンによって撮影されました。その後、そのフィルムをもとに無数の複製・改変作品が生まれ、映画会社や個人に引き継がれて今日まで残されました。関東大震災から92年たった今、オリジナルフィルムはバラバラにされてしまいました。古くて、音の無い映像は私たちに何を語りかけてくるのでしょうか。想像力をもって映像を見れば画面の中の人々のまなざしが感じられ、泣き叫び声が聞こえてきます。

* 震災直後を撮影したカメラマンについて

高坂利光（こうさか-としみつ）1904-1968

その時、高坂は日活向島撮影所で劇映画を撮影していたが、直ちに400呎フィート入りカメラを持ち出して伊佐山三郎を助手に浅草、日本橋、銀座、日比谷に向う。その後、撮影済みのフィルムを抱えて日本海回りで京都にたどり着き、9月8日に上映した。

代表作「愛に甦へる日」 1923年 監督溝口健二

白井茂（しらい-しげる）1899-1984

白井はその時、大宮で撮影していたが、直ちに飯田橋の東京シネマ商会に帰り、2日目から3日間にわたり命がけで被災現場を奔走し、全長5000呎におよぶ撮影をした。代表作『関東大震災大火実況』、同年10月公開。「南京（戦線後方記録映画）」1938年「信濃風土記より・小林一茶」1941年、監督亀井文夫

岩岡巽（いわおか-たつみ）

日本の映画黎明期のカメラマン岩岡巽は1905年日露戦争旅順攻囲戦のアナトーリイ・ステッセリと乃木希典の「水師営の会見」を撮影したカメラマン。震災当時は根岸で「岩岡商会」を設立していた。現存する震災のフィルムは岩岡が撮影したものが多いという説もある。

代表作「日露戦争活動写真」1905 「日本労働問題」1919年